

シニフィアンとシニフィエの系譜

— von Humboldt と de Saussure を中心に —

加 藤 重 広

《キーワード：言語学史，シニフィアン，シニフィエ，フンボルト，ソシュール》

0. はじめに

Saussure (1916) に示された, signifiant と signifié の結合によって言語記号が構成されるという考え方は, 現在でも言語学の基本的知見のひとつである。本稿では, ソシュール以前のシニフィアンとシニフィエをめぐる考え方, いわば意味観の流れを素描する。その中でも Wilhelm von Humboldt の意味観をソシュール以前の言語研究の典型として, ソシュールのそれと比較して論じる。また, ソシュールの考えを継承しつつ, 独自に発展させたラカンの思想にも触れる。

意味観の流れをたどるには, いわば思想史, 厳密に言うなら言語思想史として論じる立場のほかに, 言語学史として論じる立場が考えられる。本稿では, 言語学史, すなわち, 言語学の学説史のひとつとして, このテーマを扱う。言語学は近代科学としての歴史は浅く¹⁾, 古い時代にさかのぼろうとすると言語学前史的色彩が濃くなり, 現在の言語研究者の関心や方法論との違いが鮮明になる。いわば思想史や哲学史に分類すべき内容が中心になる。しかし, それにもかかわらず, Mounin (1967), R. H. Robins (1967)²⁾ など言語学史を網羅的に扱った, 比較的初期の著作でも, 近代以前の言語研究に関する記述がかなりの分量を占めており, その傾向は現在も変わらない。実際, 古代ギリシアや古代ローマでは, すでに品詞論をはじめとした文法研究³⁾が行われている。また, 古代インドではすでに紀元前 5 世紀に包括的なサンスクリッ

1) 何を以て言語学の始まりとするかには諸説があるが, 現在の言語学がその基本的な方法論の多くを比較言語学に負っていることから, 1786 年 2 月 2 日に William Jones 卿がインドのカルカッタで行った講演 “On the Hindus” でサンスクリット語とラテン語・ギリシア語などのヨーロッパの言語の親縁関係を主張した時点を近代言語学の出発点と見なすことが多い。Jones 卿以前にも印欧語の親縁関係を論じた者はあったが, その後の言語研究の方向性を決めたという意味ではやはりこの講演が比較言語学的な研究の嚆矢となったと考えるべきだろう。

2) 初版は 1967 年だが, その後改訂され, 現在は三版。参考文献には R. H. Robins (1990³⁾) として挙げた。

ト語の文法的記述⁴⁾が行われており、これらは言語学的な研究と見なしても問題がないような水準と内容を具えている。本稿も、先行研究の多くに倣い、近代言語学の成立以前の時期も考察の対象とする。

言語学史という研究領域は、近年欧米を中心に認知されるようになり、言語学史を専門とする研究者も少なからず活躍している。しかし、日本では、言語学そのものの歴史の浅さ⁵⁾のせいか、重要視されることは全くない。このことは、言語学が多様化しつつ進歩し、これまでの成果を世界的規模で再評価する必要性が唱えられている時期に、日本の言語学だけが再評価の機会を逸する危険性に直結している。日本には、明治初期までの国学の流れを汲む言語研究があり、近代以降も国語学や言語学の研究が行われてきたのであり、これらは十分に言語学史の中での再評価に値するものだ⁶⁾。日本の言語研究史は、これまで国語学史の対象とされてきたものに、近代以降の言語学の研究史、各個別言語の研究史を統合するようなものになるであろう。これらが世界的規模で記述されようとしている言語学史に組み入れられる必要がある。現在では、言語学史に日本での研究が登場することは皆無と言っていいほどなのである。

しかし、本居春庭の『詞八衢』が刊刻された文化五年⁷⁾、即ち 1808 年は、Friedrich Schlegel が「比較文法」(vergleichende Grammatik)⁸⁾という用語を初めて用いた年にあたる。この時期はヨーロッパにおいても近代言語学の草創期であるが、同時期に日本でも科学的な言語研究が始まっていたのである。それでも、このことは国際的にはあまり知られていない⁹⁾。

本稿では、具体的なテーマを論じる前に、まず第 1 章で言語学史の意義と方法論を簡略に論じる。ついで、第 2 章で、シニフィアンとシニフィエをめぐる意味観の流れを考察することにする。

3) その後の文法研究に影響を与えた「八品詞」という考え方は、すでにDionysios Thraxの“τέχνη γραμματική”に現れている。この考え方は、ローマでの文法研究へと引き継がれ、現在の school grammar の基礎になった。

4) Pāṇini の *Aṣṭādhyāyī* の成立年代は、600 B.C. あたりというのが一般的な説であるが、300 B.C. という説もある。いずれにせよ、現在確認されている最古の文法研究と見なしてよいだろう。

5) 東京帝国大学に博言学科が設置されたのが 1886 年(1900 年言語学科と改称)である。

6) 現に、これまで欧米中心だった言語学史は、世界規模での言語学史でなければならないという認識が高まっている。このためアジア・アフリカの言語研究の歴史を記述する動きが盛んで、エジプト、中東、インド、中国などについては、いくつかの研究がなされている。

7) 既に文化二年(1805)には、一通り稿は完成していたとされる。この年は、J. C. Adelung und J. S. Vater による *Mithridates* が刊行された始めた年でもある。*Mithridates* は四巻からなり、完結したのは 1817 年である。

8) 近年、生成文法において comparative grammar と呼ばれている研究とはむしろ異なる。vergleichende Grammatik はその後の Franz Bopp の著作により知られるようになったが、これらは比較によって語形の歴史的再建を行うという意味である。

9) 全く知られていないわけではなく、Stammerjohann, Harro et al. (1996) などには、宣長とともに春庭も収録されている。

1. 言語学史の可能性

1.1. その必要性

それぞれの学問領域には、その学問の発展を歴史的に記述し、また必要に応じて分析・総合する学説史が存在しうる。哲学には哲学史が、数学には数学史が、経済学には経済学史が、それぞれにその学説史として存在している。むろん、学説史ともとの学問領域は似て非なるものである。学説史は、当該の領域の外側にメタ的に存在するものだからである。つまり、言語学に対する言語学史は、言語学の一領域をなすのではなく、言語学の流れを歴史的にときおこすことによって、言語学の現在を逆照射すると考えるべきであろう¹⁰⁾。

言語学は今世紀に入って、急速にその領域を拡大し、また、研究の内容も手法も多様化してきた。また多くの学問領域に共通することではあるが、高度に細分化され、専門化も進んだ。このため、言語学という領域全体の見通しは悪くなり、交通は円滑さを失いつつある。この点についての、言語研究者の認識はおおよそ一致していると考えられるが、問題の捉え方はさまざまである。それぞれの目的とするところが異なる以上、個々の研究が独立してリゾーム的に発展するのはやむを得ないとする立場を一方の極とすれば、つながりを失いつつあるそれぞれの分野を統合する必要があると考える立場がもう一方の極になるであろう。前者は、言語学という枠組みそのものを絶対視しないという点で評価できるが、求心力を失った個々の言語研究がお互いの成果を十分に活用できない無秩序なものになる危険性をはらんでいる。後者は、全体を俯瞰できる立場を与えることでそれぞれの成果を取り入れるなど、相互交通を円滑化するという点で有効であり、研究の効率性も結果的には高くなるであろうが、それぞれの分野に言語学の下位分野という足枷をつけることになる可能性が残る。

後者の態度に与する研究者にとっては、言語学史は大いに意味を持つであろう。つまり、それぞれの研究の現在位置を明らかにし、その関連性を記録するのが言語学史だからである。この場合、言語学史が言語研究全体の求心力を高める役割を担うであろう。むろん言語研究全体を有機的に構成し直すのは、一般言語学の役目であって、言語学史はそのための知見を提供するにすぎない。

1.2. その方法論

方法論は、何を明らかにするための研究であるかということと密接に関わるものであり、具体的事例を論じることなく一般化してもさしたる意義はなかろう。Breckle(1986)は、internalism と externalism という方法論の区分を論じているが、いずれがより適切かは扱う

10) 同様の考え方は、例えば、R. H. Robins(1990³: 3ff) にも見いだされる。

内容と論じる目的による。古田・築島(1972)は、歴史を論じる際の視点をどこにおくかという点で方法論を二つの方向にわけているが、これも同様に、いずれかが優れた方法論とするような関係にあるものではない。個々の研究の実情に合わせて選択されればよい。

言語学史では、個々の研究の具体的全体像を明らかにするとともに、それらがどういった共通性や違いを持っているか、またどういった影響を受けているか、どういった影響を与えたかといったことが、多くの場合中心的なテーマとなるであろう。しかし、《影響》を論じることは難しい。例えば「Ferdinand de Saussureは社会学者Émile Durkheimの影響を受けている」とよく言われるが、同時代人や先人の影響を受けるのはある意味で当然でもあるので、「AはBの影響を受けている」という言述そのものは積極的な意味を持たない。Koerner(1987)は、influenceという用語をunconscious influence, presumptive influence, authenticated influenceの三種類に分類している。人間は時代の思潮や先人の思想などは、本人が意識しないうちに取り込んでいることがあり、これがKoernerのいうunconscious influenceである。本人が引用したり、その発想などの典拠として明示していなくても状況証拠から直接的な影響が推定できる場合、これをpresumptive influenceと言い、本人による引用や典拠の明示によって、影響関係が明らかなのがauthenticated influenceである。むろん、《影響》は、Koernerの三分類につきるものではない。必要に応じて細かく定義する必要がある。しかし、いずれにせよ、《影響》はその内容を具体的に示さなければならない。

1.3. 教育的意義

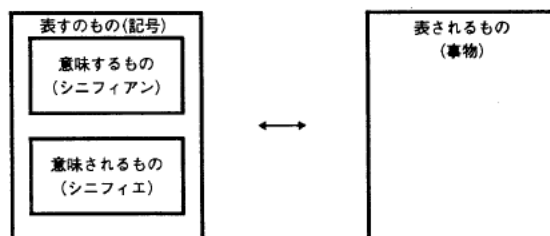
言語学の歴史を記述することはなにも言語学に対するフィードバックに終わるものではない。例えば、Chomskyらの統辞分析の方法論はそれ以前のアメリカ構造言語学の方法論に多くを負っているが、初めて言語学や関連領域を学ぶ者にとって、両者を対比することは無意味ではないはずだ。現に、Chomskyは自らの立場を言語学の歴史の流れの中に位置づけることを早い時期から行っている(Chomsky(1966, 1972²⁾など)。生成文法が構造言語学の時代からどのように方法論が精緻化されて来たかを見ることは、その理論の全体像を理解する上で重要な役割を果たすこともあるだろう¹¹⁾。

11) 日本の大学での、言語学入門あるいは言語学概論と称する講義が何らかの形で言語学の歴史を扱おうとする傾向があることから、言語学史の教育における重要性は指摘できる。

2. シニフィアンとシニフィエの系譜

2.1. 二分法の伝統

シニフィアンとシニフィエは、文字通り *signifiant* 「意味するもの」と *signifié* 「意味されるもの」という分詞形を用いていることから分かるように、両者は、ものの表と裏のように分かちがたい関係になっており、それは、Saussure(1916: 157) で “La langue est encore comparable à une feuille de papier : la pensée est le recto et le son le verso” と紙葉の表裏に例えられてもいる。しかし、「意味するもの」と「意味されるもの」の関係は、言語記号についての *dichotomy* とは限らない。古代にさかのぼると、この *dichotomy* はむしろ言語記号ではなく、指示行為における対立関係なのである。従って、Saussure の言う言語記号の恣意的性質 (*le caractère arbitraire du signe linguistique*) を古代ギリシアでの $\theta\acute{\epsilon}\sigma\iota\varsigma$ か $\phi\acute{\upsilon}\sigma\iota\varsigma$ かの論争に準えた説明は、本質的な誤りを含んでいる。確かに「意味するもの」と「意味されるもの」の関係を慣習的とすることは、両者の関係の本質的恣意性を論理的前提とするものであるから、Saussure の考えに一脈通じるものがあるように見える。しかし、Plato の *Cratylus* で論じられているのは「ものには本来正しい名前がそなわっているかどうか」ということであり、これはシニフィアンとシニフィエの関係を論じているのではなく、言語記号と指示対象の関係を論じているのである。すなわち、 $\acute{\omicron}\nu\omicron\mu\alpha$ 「名前」と $\pi\rho\acute{\alpha}\gamma\mu\alpha$ 「もの」との関係を、主として言語の起源を背景的関心として論じていたのであって、これは古代ローマでも *signum* と *res* の関係として続いていく。むしろ、この *dichotomy* にはさまざまなバリエーションがある。Augustinus は、記号の向けられる対象を加えており¹²⁾、更に時代が下れば St. Thomas Aquinas の「音声は意味表出のために存在する」という思想も観察できる。Aquinas の *dichotomy* は既にソシュールのシニフィアンとシニフィエの関係に相当するものである。ストア学派なども含めて近代以前の意味観の流れは容易に単純化できない部分が多い。本論文は主として Humboldt, Saussure, Lacan の比較に力点を置くので、前史の詳細に関しては機会を改めることにし、以上に留めておく。



12) 記号を向ける対象は、記号の受信者のことであり、必然的に記号の発信者が存在することになる。このことから、四肢構造と見ることも可能である (加藤武 (1991: 315))。

ただ、ここで「意味するもの」と「意味されるもの」の二重性を確認しておかねばならない。この関係は、シニフィアンとシニフィエの関係であるとともに記号と事物の関係でもあり、また、シニフィアンとシニフィエは記号を構成しているという点で、「意味する／される」という相互関係がさらにその中に取り込まれたような形になっているからだ。簡略に図示すると上のようになるであろう。

2.2. Wilhelm von Humboldt

Wilhelm von Humboldt は、1767 年 Prussia の Potsdam で生まれた。思想面では、Kant の影響を強く受けたと言われる。Hegel の同時代人であり、彼が活躍を始めた時期はちょうど近代言語学が産声をあげようとしている時期でもあった。外交官であり、政治家であった彼の思想は言語哲学的なもの以外にも、文学、歴史、教育、政治など多岐に亘っている。言語に関する論文や著作は 18 世紀末から 1835 年に亡くなるまで発表され続けた。主著とも言える *Über die Kawi-Sprache* は死後の 1836 年に刊行され始め、第三巻が出て完結したのが 1839 年であった。ヨーロッパの言語が研究の中心であった当時において、すでにアメリカ大陸の言語やアジアの言語を論じている点は、他に類を見ない。その研究も文法論から形態論、類型論、語彙論に一般言語学的なものなど多岐に亘っている。但し、19 世紀の言語研究は比較言語学が確立していく過程であり、歴史言語学的な研究が多くない彼の影響はあまり表面には出てこない¹³⁾。

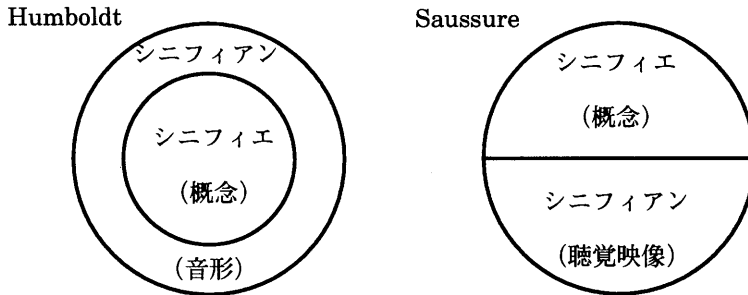
Humboldt に見る「意味するもの」と「意味されるもの」は、前節の記号と事物の関係ではなく、Saussure 的なシニフィアンとシニフィエに相当するものであるが、Saussure のそれと決定的に異なる点がある。両者の関係である。

Über die Kawi-Sprache の第 1 巻は通例 *Einleitung* と呼ばれ、サンスクリット語をはじめとする、いくつかの実例は含むものの、全体として一般言語学的な考察となっている。そこで Humboldt は第 20 章¹⁴⁾を *Lautsystem der Sprachen — Lautform der Sprachen —* と題して、その冒頭で、*Die Lautform ist der Ausdruck, welchen die Sprache dem Gedanken erschafft. Sie kann aber auch ein Gehäuse betrachtet werden, in welches sie sich gleichsam hineinbaut.* と述べているのである。即ち、Humboldt にとって「音形」*Lautform* とは *Gehäuse* である。*Gehäuse* とは「容器」であり、カタツムリなどの「殻」でもあり、テレビの「キャビネット」であり、「カプセル」や「カバー」でもある。Humboldt は一貫して、

13) しかし、青年文法学派の方法論に対する Humboldt の影響は疑いないものであり、言語決定論については Sapir や Whorf に連なる思想的系譜も考えることができる。いずれも Humboldt の後継者を以て任ずる Heymann Steinthal が中継点的に介在している。前者については、加藤 (1996) を、後者については Brown (1967) などを参照。

14) 章立ては、Humboldt 研究で一般的なテキストとして用いることが多いアカデミー版に基づいている。初版本では、第 10 章になっている。

「概念」を分節された思考としてとらえている。言語化される以前の未分節で無定形の思考を分節化するものが、Humboldtの言う *innere Sprachform* であり、その結果得られた分節思考が概念なのである¹⁵⁾。いわば水のように形がなく、部分も全体もないものに、形を与えて個別の存在にすることが Humboldt の言う分節 (Artikulation) なのであり、その形を与える *Gehäuse* 「容器」が *Lautform* 「音形」なのである。この場合、シニフィエを包むような外皮や容器のイメージがシニフィアンである。これを試みによく知られた Saussure (1916) と比較しつつ図示すれば次のようになる。但し、Humboldt は当然シニフィアンやシニフィエと言った表現は使っていないし、また Saussure も図では *concept* や *image acoustique* と言った表現を用いている。



一見するとフンボルトのシニフィアンとシニフィエの関係は、ロゴス中心主義的で、《肉体＝物質》を《精神》に従属させる西洋知の典型のようにも思われる。確かに、Humboldt は「概念」は「理性」を表すものであり、「音形」は「感性」を表すものとしており、思考は器である音形によって自由を制限されていると考える。しかし、それでいて、完璧に調和した語においては概念と音形は相互に依存し合う関係なのではないとも述べている (Humboldt (1836: 95ff))。無定形でそれ自体では個別の明確な存在となり得ない思考は、音形という器によってある種の制限を受けるのはやむを得ないと考えるのである。この点では、シニフィアンがなければシニフィエは具体的存在、即ち分節概念として存在し得ないということになる¹⁶⁾。とは言え、Humboldt は Saussure のように、シニフィアンとシニフィエは対等だとは考えない。音形の *Gehäuse* という比喩が明確に示すように、概念に対する音形は内容物に対する入れ物であって、やはりシニフィアンはシニフィエに従属しているのである。重要なのは、シニフィエをシニフィアンに対して優位な位置にあるとはしていても、音形は音形で体系をなすもの、概念は概念で体系をなすものと見なしている点であり、全く指示対象である「もの」は出てこないことである。Humboldt に至って、シニフィエとシニフィアンの純粋な *dichotomy* が準備されたと考えることができる。

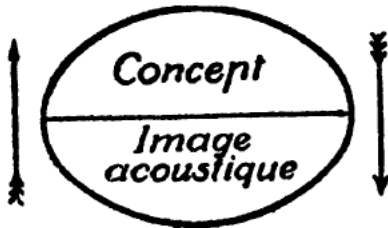
15) この考え方は、Humboldt (1836) のほかに Humboldt (1821) などにも見て取れる。

16) 言語以前の概念形成を全く認めていないわけではない。Humboldt (1836: 89f) を参照。

2.3. Ferdinand de Saussure

Saussure は Humboldt に遅れること 90 年、1857 年に生まれている。Saussure が言語学者として活動し始めた 19 世紀末は、比較言語学の方法論が完成を見ようとしていた時期であった。Saussure の思想は、今世紀の人文知に大きな衝撃を与えたと言われるが、それは Charles Bally と Albert Sechehaye が編集した Saussure(1916) によってと言っても過言ではあるまい。そして、これまでの綿密な研究により、実際の Saussure の思想とこの講義録には少なからぬ齟齬があることが明らかになっており、実質的な筆者であった Albert Sechehaye が誤解していた部分があったり、恣意的な編集が行われたことも分かっている。しかし、シニフィアンとシニフィエに関する思想の根本的な部分は Saussure(1916) に示されているものと重大な差異を含まないと思われる。よって、適宜その後の研究を利用するほかは、Saussure(1916) によって論じることにする。これは、言語学史における Saussure はやはり Saussure(1916) の Saussure だからでもある。

Saussure(1916) のシニフィアンとシニフィエをめぐる言説は、ひろく知られているが、今一度確認しておきたい。



Saussure(1916: 99) は上のような図をあげている。*Concept* がシニフィエ、*Image acoustique* がシニフィアンにあたる。矢印が上から下、また下から上へ伸びているのは両者が相互に密接不可分な結合をしているからである。例えば、{|木|} という概念には /ki/ という音が不可分に伴い、/ki/ という音には {|木|} という概念が不可分に連れ立って現れるのであり、両者は一方なくして他方が存在し得ない関係になっている¹⁷⁾。これは、紙の表裏のような関係でもあり、水と空気が相まって波という現象が見られるという比喻でも説明できる。波は、水

17) {} で概念を表すことにする。// は通例言語学的記述で音韻表記を表すが、ここでも音韻表記として用いている。というのは、*image acoustique* は「聴覚映像」などと矛盾した訳語を与えられることもあるが、実質的には、実際の音のレベルではなく *sujet parlant* 「語る主体」から見た音のイメージを表しているものであり、前者が音声学的な単位としての音であるとすれば、後者は音韻論的単位としての音素を意味していると考えべきだからである。しかもこの *image acoustique* には超分節要素なども含まれているだろう。Saussure の時代はまだ音素 (phoneme) の概念は一般的でなく、言語学の常識的知見となるのは第二次世界大戦後の構造言語学の時代である。なお、Saussure(1916: 99) では *image acoustique* を *phonèmes* ではなく *son* あるいは *syllabe* だと述べられているが、この場合の「音素」と「音」は現在の言語学が用いている用語法とは逆転している。このことは、小林英夫訳『一般言語学講義』(岩波書店、1972²⁾) の訳者注にも同様の指摘がある (p. 416)。

だけでも、空気だけでも、生じない。それは両者の**関係の現れ**として見るべきものであり、形式 (*une forme*) なのである。波は結局一種の現象なのであって、実質 (*une substance*) ではない¹⁸⁾。この場合の「波」は *signe* 「記号」にあたる。個々の言語記号はいわばシニフィアンとシニフィエの関係性によって立ち現れてくる現象のごときものなのであって、実体的な存在なのではない。ただ混乱を惹起しかねないのは、これらの言語記号はまた *langue* という体系を関係論的に構成する単位でもあり、構成単位として扱い始めると本来関係論的存在である *signe* を実体のごとき存在と見なしかねないことである。Saussure がシニフィアンとシニフィエの結合について、*cette combinaison produit une forme, non une substance* と言うとき、この点を主張しているのである¹⁹⁾。このことは恣意性の議論でも混同されがちな点である²⁰⁾。

ログス中心主義的な Humboldt の発想と違って、Saussure のシニフィアンとシニフィエは対等な資格で結びついているものであり、いずれかが主、いずれかが従ということはない。いわば、関係の中から浮かび上がってくる *signe* という単位において、実体論的な存在と見ることが前提となる一方的な従属関係を考えること自体が矛盾するのである。

また、Humboldt の場合、音形の *sachlich* な部分を念頭に置いており、シニフィアンとシニフィエはそもそも性質の異なるものを合わせるという見方をしているため、本質的になんらかの齟齬があり、対等な関係でないという結論に結びつく²¹⁾。

2.4. Saussure 以後

Saussure 以後、シニフィアンとシニフィエの問題を重要なテーマとして扱ったのは、記号学者の Roland Barthes と精神分析学者の Jacques Lacan であろう。本稿では、Lacan におけるシニフィアンとシニフィエを概観しておきたい。

Lacan は、Saussure において対等な関係とされたシニフィアンとシニフィエに一方の優位性を導入した。それは、Humboldt 以前に見るようなシニフィエの優位性ではなく、シニフィアンの優位性なのである。この点で、Humboldt で優位とされたシニフィエは、Saussure ではシニフィアンと対等なものとなされ、Lacan に至ってシニフィアンが優位に立つということになったのである。いわば、シニフィアンとシニフィエの優位性の転倒が生じたわけである。

18) Saussure(1916: 156f)。同書では波を図示することによって説明している。

19) Tulio de Mauro の Saussure(1916) の註 (#227) ではフンボルトに前例が見られるとの指摘がある。確かに Humboldt は *Form* 「形式」という語を頻繁に用いているが、関係論の規定と結びつく Saussure の *form* 「形式」とは異なっていると見るべきだろう。

20) 丸山(1981: 296ff)

21) Humboldt は、音声の表示法を①非分節音をそのまま模倣する、②音が意味を象徴するように表示する、③体系的な類推関係によって表示する、という3つの段階に分けており、より言語が進歩し、完成に近づくほど、①から②、②から③へ移行すると考えている。②はいわば音象徴的な発想であり、③は音形の体系が概念の体系と調和した段階を表し、前者は *Symbolische Bezeichnung*、後者には *Analogische Bezeichnung* という名がついている。

また、Lacan はシニフィアンはいかなる思惟 (cogitation) を欠いても存在可能だとし、そのシニフィアンが主体 (sujet) の中に疎外的な侵入 (intrusion aliénante) を行うと述べている。この場合の主体 (sujet) は、話者のことである。確かにパロールの次元では言語音として実現されるため、シニフィアンは、それが意味を持たないものであろうと存在しうる。これは、Humboldt の想定していた sachlich なシニフィアンに通じるものであり、関係論的なシニフィアンを考えた Saussure の見方とは相容れないものだ。つまり、Lacan の言うシニフィアンは、主体にとって実体として振る舞い、話者の意識の中に他者として侵入してくるものなのである。

そして、Lacan はこのことは精神分析が扱わなければならないことだとも言う²²⁾。確かに、Saussure(1916)では、社会的事実としての langue が研究対象とされており、Lacan が考えるシニフィアンの問題は言語学の扱うべき対象からはやや逸脱しているのかもしれない²³⁾。

langue という体系内で対立によってコト的に存在しているそれぞれの signe は、その対立によって価値を有しうる。しかし、langue という体系から外れ、それでいて signe のごとく装っているものがある。固有名詞である。加藤重広(1991)に論じられているように、固有名詞は特定言語の音素によってそのシニフィアンを構成している。それでいて、体系内部での対立によって存立しうるシニフィエは持たない。いわば、固有名詞はシニフィエが空項になった記号なのである。加えて、langue という抽象的なレベルではシニフィエを伴った十全の signe であっても、個々の sujet のレベルではシニフィエを伴わないシニフィアンとして現れることも珍しくはない。意味を知らない語を耳にした場合を想定すればよい。

また、Lacan は、Saussure において密接不可分とされたシニフィアンとシニフィエについて、両者は分断可能とした。これも精神分裂病においてシニフィアンが暴走していると解釈で

22) Lacan(1966:18) では、次のように述べられている。

La primauté du signifiant sur le signifié y apparaît déjà impossible à éluder de tout discours sur le langage, non sans qu'elle déconcerte trop la pensée pour avoir pu, même de nos jours, être affrontée par les linguistes.

Seule la psychanalyse est en mesure d'imposer à la pensée cette primauté en démontrant que le signifiant se passe de toute cogitation, fût-ce des moins réflexives, pour exercer des regroupements non douteux dans les significations qui asservissent le sujet, bien plus : pour se manifester en lui par cette intrusion aliénante dont la notion de symptôme en analyse prend un sens émergent : le sens du signifiant qui connote la relation du sujet au signifiant. (イタリックなどは原文のまま)

最後の一節からも分かるように、Lacan は langue の次元でシニフィアン・シニフィエを論じているのではなく、あくまで sujet にとってのシニフィアンを論じているのである。従って、個人によってそのシニフィアンの意味 (sens) の立ち現れが異なるのも当然のことなのである。

23) その後の Saussure 自身の真の思想を解明する研究の進展により、Saussure(1916) に示されている内容よりも Saussure は langage をはじめとする人間の根源的な範疇化能力に関心を寄せていたことが明らかになっている。また、Hermann Paul は、言語学の研究は抽象的な言語のレベルではなく、個人の言語体系を明らかにすることから始めるべきだとしている。話者個体を想定する点では Paul は Lacan と一脈通じるものがあるが、Paul の場合抽象化されないデータを得るための方法論である点で本質的に異なる。(Paul(1920⁹: 24 ff) 参照)

きる症例を分析することによって明らかにできるものである。つまり、Lacan のシニフィアンは主体にとって実体的に関わるものであって、社会的事実としての langue という観点からすればシニフィアンはやはりシニフィエとともに関係論的に成立しているのである。従って、両者は議論の次元が異なるのであって、相互に矛盾しているわけではない。

langue はそれじたいを特定共時態 (ideosynchronie) において抽象的な次元で見れば、その体系内で記号どうしが対立することで生じているコト的なものであるが、特定個人にとっては langue は習得すべき外在的なものであり、まさにモノ的に存在しているのである。

3. 結語

本稿では、まず、従来その重要性をあまり省みることのなかった言語学史の重要性や関連する事柄を論じ、引き続いて、その実践としてシニフィアンとシニフィエに関する流れを分析した。

単純化して言えば、Wilhelm von Humboldt まではロゴス中心主義的な見方が主流で、ここでは精神や理性を象徴するシニフィエのレベルが物理的なシニフィアンに対して優位なものとされていた。Ferdinand de Saussure は、シニフィアンとシニフィエを関係論的に成立し、対等な資格で結びつくとし、ロゴス中心主義的な発想からは脱却した。更に Lacan は、言語を実際に運用する個人のレベルでシニフィアンを見たとき、その実体的な存在性が《話者＝主体》の心理にとってはあたかも侵入者のごときのものであるとした。

シニフィアンとシニフィエのあり方は言語学においてはきわめて根本的なテーマであるにもかかわらず、いやむしろ根本的があるがゆえに、現在において議論されることは少ない。本稿では詳しく取り上げることでできなかった言語学前史の思想や、Barthes や Lacan についても今後機会をとらえて論じたい。

参考文献

- Aarsleff, Hans et al. (1987) *Studies in the history of the language science 38, Papers in the History of Linguistics*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam
- Breckle, H. E. (1986) "What is the history of linguistics and to what end is it studied? — A didactic approach" in Bynon and Palmer (ed) (1986) pp. 1-10
- Brown (1967) *Wilhelm von Humboldt's conception of linguistic relativity*, Mouton, the Hague
- Bynon, Theodora and Palmer, F. R. (ed) (1986) *Studies in the history of Western linguistics — in honour of R. H. Robins*, Cambridge University Press, Cambridge
- Chomsky, Noam (1966) *Cartesian Linguistics*, University Press of America, Inc., Boston
- (1972²) *Language and Mind (enlarged edition)*, Harcourt Brace Jovanovich, Inc., New York
- 古田東朔・築島裕 (1972) 『国語学史』 東京大学出版会
- von Humboldt, Wilhelm (1821) "Versuch einer Analyse der mexikanischen Sprache"
- (1836) *Über die Kawi-Sprache auf Insel Java I (Einleitung)* (Humboldt につ

- いては, Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften, Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, 17 Bde., Berlin, B. Ber's Verlag, 1906-1939 の写真復刻 (Photomechanischer Nachdruck) 版, Berlin, 1967 を参看)
- 加藤重広 (1991) 「固有名詞の本性」『東京大学言語学論集』11 pp. 257-284
- (1996) 「言語の体系性 一動的言語観と静的言語観一」『東京大学言語学論集』16 pp. 351-368
- 加藤武 (1991) 「アウグスティヌスの言語論」 創文社
- Koerner, E. F. K. (1987) "On the problem of 'influence' in linguistic historiography," in Aarsleff (ed) (1987)
- Lacan, Jacques (1966) *Ecrits II*, Point, Paris
- 丸山圭三郎 (1981) 『ソシュールの思想』 岩波書店
- Mounin, Georges (1967) *Histoire de la linguistique — Des origines au XX^e siècle*, Presses universitaires de France, Paris
- R. H. Robins (1990³) *A short history of linguistics*, Longman, London
- de Saussure, Ferdinand (1916) *Cours de linguistique générale*, Genève (ただし参看した版は, Édition préparée par Tullio de MAURO, Payot, Paris, 1973)
- Stammerjohann, Harro et al. (1996) *LEXICON GRAMMATICORUM Who's Who in the History of World Linguistics*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen